

外國定刊文籍抄録

第1次歐洲大戰に於ける食糧饑飢の娩發
障礙 (Sommer, Zbl. Gynäk., Nr. 7, S. 292,
1941)

第1次歐洲大戰時の食糧饑飢が當時思春期前の少女又は思春期の少女に及ぼした後胎障礙に就て檢したる所、當時思春期前にあつた少女は佝僂病が幾分多いといふ外、大なる障礙を認めない。當時思春期にあつた少女は現在33—40歳の年齢にあるが月經初潮が遅れ又月經量が少い。又性器發育不全、月經痛、月經異常、不妊の訴が多い。又妊娠しても習慣性流産、早産が多い。又乳汁分泌が少い。乳腺發育が悪い。分娩に當つては弛緩出血、微弱陣痛、早期破水、豫定日超過等の異常が多い。これは思春期にあつて性器發育の時の榮養不足が性器發育に悪影響を及ぼしたと見るべきで、教へられる所が多い。(中村抄)

乳汁分泌の生理 (P. Feldweg, Zbl.
Gynäk., Nr. 13, S. 585, 1941)

乳汁分泌を1720人の褥婦について檢した所、其の量は非常に大なる動搖を示す。併し乳汁の餘分に出る方が足りないものよりも多く。初産では20歳以下が良く、經産婦では其の分娩回数と共に其の年齢が變化して年が多なる。又年齢の外は分娩回数が關係するわけで、2回目が一番多く、次に3回目の時である。3回以上のものでも初産の人より乳汁分泌が多い。若い人は年寄より早く乳汁が出る様になる。經産は初産より早く出る。自然分娩後は90%は授乳可能な程乳汁分泌がある。

(中村抄)

子癇の豫防法 (G. Döderlein, Zbl.
Gynäk., Nr. 12, S. 529, 1941)

子癇の前驅をなすものは自覺的徴候、他覺的徴候と數多いのであるが、血壓上昇といふことは最も重要だと思ふ。而して血壓計測を繰返すことで平常低いものはそれが130mmになつても高血壓である。妊娠中は低血壓が多い。一般には150mm以上を以て注意すべき徴候とする。血壓上昇のみを示す場合も注意を要する、これに自覺症狀、他覺症狀が加はれば子癇前驅症となるわけである。かかる高血壓は妊娠前半期からも見るもので、其の時期より豫防せねばならぬ。其の他浮腫、尿量、尿中蛋白等を規則正しく檢して、早期診断により早期に治療する。安靜、食餌療法、利尿強心劑であるが、これにより子癇を極度に減少せしめらるものであることを述べてゐる。(中村抄)

陣痛誘發に對する「キニーネ」の應用。

(Andreas, Zbl. Gynäk., Nr. 9, S. 432, 1941)

陣痛誘發には色々の手段もあり、又色々の藥劑もあるが、「キニーネ」も其の一つである。併しこれは細胞、原形質に對する毒素で副作用も認められ其の用量も問題である。「キニーネ」を經口的に與へれば13—17分で、注射すれば5分で其の15—45%が尿中に排泄される。又經口的では2—3日、注射では8時間位血中に證明される。又經口的には全量の3%以上は吸収されない。而して體重50gの婦人に對しては0.05—0.1g「キニーネ」が一番適量だといふ。而して0.05gを1回量として30分の間隔を以て3回與へるのである。これを136人に應用して從來の大量を應用する方法と比較したのであるが、其の奏效率、奏效までの時間、分娩の持續時間等を考慮して少量法が有效であるといふ。(中村抄)

視神經交叉部腫瘍の診斷學的竝に治療學的問題 (Prof. P. Knapp, Klin, Mbl. f. Aughk., Nr. 10, 1940)

最近に於ける腦下垂體腫瘍の知見は長足の進歩を遂げたが眼科的にも新領域が續々と開かれて居る。この論文は綜說的に腦下垂體の解剖、生理、鑑別診斷、治療に就て述べて居るが、特に診斷に際してレントゲン寫眞でトルコ鞍の形狀の變化を判定する事は非常に難しく、不可能の事が多い、生體ではトルコ鞍の形や大きを變へる事なく、約2倍に肥大し得る事を實驗的に檢索し、且トルコ鞍上、内、側の3部に別つて、其の各々の場合の症狀を述べて居る、又眼科的には診斷上不可缺なる視野で有り、特に乳頭の所見に就ては注意を要す可きで有ると云ふ。古く Cushing 等により主張された腦下垂體腫瘍診斷の必須條件たる鬱血乳頭は左程重要でなく、初發視神經が89%に見られ、特に鞍内腫瘍では大多數に之を認める事は既に定説となつた。(梶浦抄)

「エゼリン」及び「ピロカロピン」の作用機轉 (Hrüb., Graefes Archiv., Ht. 4/5, S. 517, 1940)

著者は281眼の初發縁内障に就て實驗的竝に統計的にこの兩藥の作用機轉を追求して近視に初發縁内障が少く、遠視には逆に之が多いのは毛様體の作用の差に依るものと考へ之を基礎として、他の虹彩皺襞伸展説、血管説、隅角部説を反駁しつつ、この作用機轉は毛様體の運動に由來し、之により眼壓を低下せしむるもので有ると主張して居る。(梶浦抄)

色神の寫眞化學的研究 (Weigert and Morton, Ophthalmologica., S. 145, April 1940)

Digitonin 若くは Digitalin に各種動物の網膜感光物質を溶解し、之を「ゲラチン層」に爲した物

を作り之を人工網膜と稱して居る。著者は蛙網膜より視紅を抽出して之を作り種々の光線を分析研究して居る。この人工網膜には色彩の選擇性があり、之より得た色調曲線に因つて光を純粹又は不純と別ち得る。即ち光化學的に有效な波長に對し強度の選擇性を有して居り、色神、特に色盲の色神を研究して居る。(梶浦抄)

色素性網膜炎と内分泌の關係 (Biró, Ann. d'oculistique., P. 293, Tome. 176, 1939)

色素性網膜炎(網膜色素變性)は最近單なる獨立疾患とは考へられなくなつた。即ち頸部の交感神經節の剝離が本症に好結果を與へると云ふ事實は内分泌と關係すると云ふ説を支持するもので有る。即ち腦下垂體の作用不全が考へられて居るが、現今では更に腦下垂體のみでなく、附近の新陳代謝中樞、中間腦の生殖器榮養中樞との關係が主張されて來た。著者は更に肝臟との關係を主張し卵巢丸肝臟の抽出物質の實驗を行つて居る。

(梶浦抄)

人造材料に因る接眼「シャール」

(Györfy, Klin, Mbl. f. Aughk., S. 81, Nr. 1, 1940)

接眼「シャール」は之迄全部硝子製で有つたが破壊し易い事と細工がし難い事等幾多の製作上の困難が伴つた。著者は人工樹脂によるこの製作に成功して居る。即ち之による近視、圓錐角膜等の矯正は好結果を示し、この特徴は破壊せぬ爲薄板を作り得、低温で自由な型を得る事、軽くて弾力性が有る事等で有るが、唯柔い爲に傷が着き易く5—6箇月、即ち硝子製の半分の使用期間しか堪へ得ない。(梶浦抄)

「ズルフアニール・アミド」に依る「トラコーマ」の治療 (Thygeson., Am. J. O. P. 679, 1940)

最近同藥に依る「トラコーマ」治療法が各國で

續々と發表されて居るが、本論文もこの一つで34例の患者に10日之至2週間、流血量5mg%になるほど用ひた。その結果は16例が治癒し、11例は好結果を示し、4例は無効で有つた。且つ初期は効果が強く、癥痕性「トラコーマ」は比較的大量を用ふると良い、又「トラコーマ」の「プロバツエツク氏小體」を消失せしめ得る。(梶浦抄)

「ズルフオン・アミド劑」による一過性近視 (Hornbogen, Am. J. O., Vol. 24., P. 323, 1941)

「スルフオン・アミド劑」の中毒の際に一過性の近視の來る事は近頃になつて初めて報告され、本邦でも既に4,5例の發表が有るが之も最近の報告で有る。

28歳の女教師が或骨盤疾患の疑で2週間に涉つて總量37gの「ズルフオン・アミド」を経口的に服用した處、急に視力障害が起つて、其際視力はRV=4 M/FZ (0.7×-4.5 D) LV=3.5 M/FZ (1.0×-5.0 D=cyl-1.5 D^{70°})となつた。然し之は他の報告の如く、「ホマトロピン」の點眼により、完全に治癒せしめ得た。

「トラコーマ」に於ける Weil-Felix 氏反應に就て (Raski, Acta ophthal., Vol. 18, P. 321, 1940)

Busacca 等により「トラコーマ」の病原體として「リケツチイヤ」が着眼され、且發疹「チフス」と之が似て居ると云ふ點より、一時 Weil-Felix-反應が「トラコーマ」に特有な反應を示すと考へられたが、現今では次第に其の價値を疑はれて居る。Raski は之の文獻の考察をなすと同時に自身で111人の「トラコーマ」患者と96人の對照健康者とで之の反應を行ひ、然も發疹「チフス」のないFinlandで研究した。即ち Proteus 190を用ひて「トラコーマ」では85.6%に、對照では76.1%に陽性で有つた點から「トラコーマ」に特有でなく、診斷上の價値なきものと斷定して居る。

老人性白内障の藥物學的治療に就て (Kraus, Arch of Ophthal., P. 487, March, 1940)

米國の老人性白内障と平均年齢とて統計的に觀察し平均年齢の増加と共に白内障の増す事を知つた。現今之の治療法は手術的にやる外はないが、著者は Szily により発見された「グイタミンC」との關係やたとへ遺傳であつても藥物學的治療の可能なるものもあるから、老人性白内障の藥物的療法、進んでは豫防も決して不可能と悲觀する事はないと云つて居る。(以上梶浦抄)

男子膀胱内異物に就いて (K. Tzschirn-tsch., Zachr. f. Urol, Bd. 35, Ht. 1, S. 8, 1941)

膀胱内異物は Koblinsky 氏に依つて次の4群に分けられる。即ち 1) 治療或は診斷の目的に使用した器具、2) 手淫の爲め挿入した器具、3) 墮胎の目的に使用した器具、4) 避妊の目的に使用した器具等である。既往症は通例羞恥の爲め云はぬ、診斷は通例膀胱鏡又はレントゲン撮影に依つて分る。Sonntag 氏に依ると頻度は女子は男子に100倍する。之れは男子の尿道は女子に比して細いの依る、異物の種類を數の多いものから順に擧げると髮針、蠟燭、綱物針、檢溫器、傘把手、鉛筆「ブローチ」、小兒に於ては紙片、鷲羽、穀物穂、莖、根、「フジー」、「カテーテル」、煙草の柄、齒刷毛、「コルク」、「チユインガム」、針金、香水壺、羽毛柄、指輪、木片、縱毬果、打紐等である、異物が時には腎盂迄上行し、或は其處で結石生成に迄及ぶ事がある、膀胱内異物が無變化の儘でなく、時には痲皮形成をなす事がある、Blum 氏に依ると膀胱内に挿入されたネラトン氏「カテーテル」が6日後に早や痲皮形成を見た例を述べて居る、治療は先づ經尿道的は手術を試みる。非常に尖つた物、「ガラス」製のは高位切開を行ふ、自然排出は非常に稀れである(3.6—3.8%)、最後に忘れられぬのは手術後精神的治療法である。(岡崎抄)